

# 大学病院における 園芸ボランティア活動の実態と改善点

森村 洋子(園芸文化研究所)

園芸は植物の生命の営みの一つひとつに私達が寄り添いながら、科学的知識の探求と労働に即した技術の習得と自然美の享受とを同時に行うことができる“総合的活動”である。今、私達の社会は人間性の根底からの回復を求めて、また、日常生活における心身の健康維持を目指してこのような園芸への関心を深めている。

大学病院敷地内に花壇をつくるボランティア活動を開始してから3年を経た現在、園芸による活動がもたらす明らかな成果が認められる一方で、新たにさまざまな問題も生じている。問題の多くは、園芸という、生きた植物を材料にしていることによるものであり、また、ボランティア活動への理解および意識の定着の面での未成熟に起因するものであった。そこで、現在までの活動をふり返し、現時点での成果と問題点とを整理・分析しながら、問題解決への糸口を探ることにした。これを今後、園芸が介在するボランティア活動の意義を明らかにする一助としたい。

## 1. 現在までの経緯

2002年3月、東海大学病院小児慢性疾患患者家族宿泊施設「かもめの家」(神奈川県伊勢原市粟窪4-1)(図1)に園芸によるボランティア活動を志す市民(恵泉女学園卒業生およびその関係者を含む)14名によりボーダー花壇(20平方メートル、煉瓦囲い)を制作した。施肥、灌水などの日常管理を行いながら季節ごとに花苗を植え替え、翌年の春までに約15種、約800

株の草本を栽培した。2003年度は、特に春花壇の制作に力を注いだ結果、カンパニュラ、アグロステンマ、カリフォルニアポピー、ネモフィラ、フロックス、バコバなど15種、約300株の花々が咲き揃い、ボーダー花壇の基礎を築いた。2004年度は1年を通して高温による気候異変に見舞われ、栽培・管理が困難であった。しかし、秋には「種子から花まで」の自主管理体制をスタートさせた。近隣農園の協力を得て、10月中旬に温室内で15種の植物の播種・育苗を開始した。さらに1ヶ月後には12種の苗を花壇に定植し、霜除けのために不織布で覆い、新しい春に備えた。

## 2. 活動の成果

大学病院内に花壇を制作するボランティア活動の第一義的目的は、言うまでもなく、患者やその家族に対する精神的支援である。美しく咲き誇る花々は、見る人すべての心を和ませるに違いない。そのように考え、園芸活動を開始したところ、ほどなく、そうした対象者以上に実際に花壇を作るボランティア自身が活動への喜びを示しはじめ、それに伴って意欲的な取り組みが顕著に現れるようになった。このことは大変興味深いことであった。そこで、1年間の活動の後、園芸ボランティアを対象として活動に対する意識調査を実施した。その結果、園芸活動は、活動に直接的に関わる者自身が、発芽の段階で植物の逞しい生命力から力を得、苗を育てる細やかな作業から愛育の喜びを与えられ、開花した花々の美しさに深い感動を覚えるなど、人間性を呼び覚ます精神面の充足が十分に期待できる活動であることが明らかになった（「園芸文化」第1号に発表）。

## 3. 現時点での問題点

### 1) 植物栽培・管理における問題

1年を通して花壇を美しく彩るためには、さまざまな草本植物の特性を知ること、栽培技術を習得し、それらを実際の活動に活かすことが求められる。しかし、ボランティア集団が植物および植物栽培の知識や技術を身につけるためにはかなりの時間と努力を要するはずである。この

ことを理解しないかぎり、予期しない栽培上のトラブルが生じることになる。今年度は、夏期の高温下での花壇材料(植物種)選定および秋の播種後の温度管理と植物特性との関係把握において、十分な対応がなされたとはいえず、結果的に今後解決しなければならない、大きな課題を抱えることになった。

## 2) ボランティア活動に関する問題

ボランティア活動が3年目に入った頃から活動に熱心なメンバーとあまり参加しないメンバーが固定化する傾向が現れた。それにより活動グループの労力的、時間的負担が増大することは避けられない。また、植物が相手の活動であるために、定期的な活動形態をとることが困難であり、時に、メンバー同士の意思の疎通を欠く事態も起こる。このようなことが引き金となり、ある時期にメンバーのうちの数名が同時に退会することになり、このことはボランティア活動の本質を問われる出来事であった。

## 4. 問題解決への方策

### 1) 植物栽培・管理

夏期の花壇材料選定については高温が長期間続いた今年度の結果から、あるヒントが与えられた。植物種による環境耐性の違いを把握することと、全般的に苗の定植時期を早めることである。具体的には、2004年8月、猛暑が続く中で、7月中旬に定植したニチニチソウ70株がすべて枯死、植え替えた90株も約2週間後に枯死してしまった。高温、乾燥状態が続く中で、土壌中の病原菌が茎の中の水分を送る導管の機能を止めたためと思われる。ペチュニア、コリウスも花勢、草勢は思わしくなかった。しかし、同様に7月に定植したジニア、トレニアは猛暑の中でも花勢が衰えることなく、10月下旬まで花壇を美しく彩った(図2)。ジニア、トレニアは、種の特性に加えて、定植の際、他の植物種に比べ、若い苗を用いたことが根の生育を活発にし、枯死を防いだのではないか

と思われる。

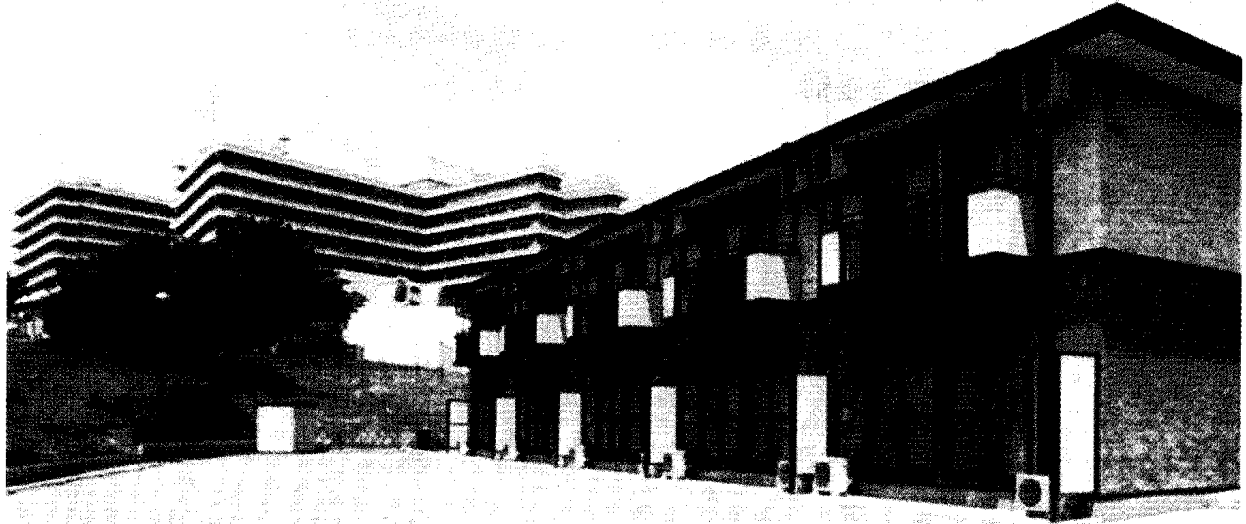


図1. 東海大学病院小児慢性疾患患者家族宿泊施設「かもめの家」  
右の建物が「かもめの家」、正面奥は東海大学病院、現在は東海大学病院の改築工事のために花壇を左手の草地部分から正面奥に移し、仮花壇として栽培・管理を行っている。

翌年春に備えて、10月に15種の種子をシードパンまたはポットに播いた。その後の温度管理および栽培については今後、改善の余地があると思われたので、その内容を表1にまとめた。

## 2) ボランティア活動

最近、園芸による社会貢献が、さまざまな形で広く行われるようになってきている。しかし、一方で私たちの社会は、まだ、社会貢献としてのボランティア活動が、活動の当事者自身の人間的成長のために不可欠なものとして十分に受け入れられるまでには至っていない。そのためにボランティア活動のとらえ方や活動への取り組み方に個人差が生じる場合がある。このような事態を避け、誰もが意味深い活動として継続していくことができるようにするためにいくつかの対応策が考えられるであろう。



図2. 高温下で花勢を保つジニア (2004年8月)

園芸活動には、植物栽培上の特性や季節、天候との関係から活動の繁忙期とそれほどの活動を要しない時期とが生じる。ボランティア活動は活動することにより初めてメンバー同士の理解や親交を深め、充実した活動への取り組みが期待できる。そのために活動を行わない期間が長びくことを避け、相互の連絡が不十分にならないように配慮しなければならない。このための対応策としてもっとも重要であり、意義深いと思われるのは、病院を活動の場としている園芸ボランティアが、対象者である患者や患者の家族との交流の機会を持つことであろう。それにより、ボランティア同士の交流が一層盛んになるばかりでなく、ボランティアが立場の異なる対象者の状況を正しく理解し、活動の意味を一層深く自覚することになると思われる。また、活動が相手にどのように受け取られているかを直接的に知ることができれば、それがボランティアの活動への励みとなることも十分考えられる。これまでは花壇制作の基盤を作ることを優先してきたため

表1. 秋まき花壇材料の栽培時の温度適性と対策

植物種	温度適性	栽培経過	改善事項
アグロステンマ ビジョナデシコ カスミノウ ビスカリア ネモフィラ モモイロタンポポ ワスレナグサ ニゲラ ルピナス カリフォルニアポピー	強耐寒性	10月中旬温室内で播種・栽培 20℃で発芽、15℃で育苗 11月下旬に屋外の花壇に定植し 全面を不織布で覆った。	播種時期を早め 根の生育を促す。 また、定植時期を 早め、温室内での 葉茎の徒長を防ぐ。
チロリアンデージー	強耐寒性	10月中旬温室内で播種・栽培 20℃で発芽、15℃で育苗 生育が遅く、定植は春となる。	播種時期を早め 秋のうちに屋外 花壇に定植する。
セラスチウム キセランセマム	やや強耐寒性	10月中旬温室内で播種・栽培 20℃で発芽、15℃で育苗	
ガザニア フェリシア	弱耐寒性	10月中旬温室内で播種・栽培 20℃で発芽、15℃で育苗 2月上旬花蕾を付けた。	花蕾を付けない ようにするために 無加温温室での 栽培が望ましい。

にこのようなボランティア活動の対象者との機会が少なかった。この点について改善の必要があると思われる。

また、園芸によるボランティア活動に関心を持ち、集まったメンバーは、例外なく“園芸好き”である。したがって、活動の閑暇期に植物園を見学したり、播種・栽培についての学びを深めることを心がけ、できるだけ、定期的活動の形態をとることが望ましいと思われる。

いずれにせよ、ボランティア活動においては、当事者間の連携を密にすることが活動の意義を相互に確認し合う上で重要であり、それにより活動の継続が容易になり、活動内容の充実が期待できると考える。

## 5. まとめ

恵泉女学園の園芸教育は創始期より一貫して「美しさを味わい、額に汗して花や野菜を作ることにより身も心も健康になること、そのために科学的研究と実践とが並行して行われること、そのような教育は奉仕の道にも叶うものであり、携わる者に誇りを与えるものであること」(『わたしのランターン』より)にその意義と目的があると明示している。それらはいずれも園芸活動に自ら主体的に、継続的に関わることによって、より深く学び得るものであろう。

一方、厚生労働省は先頃、日本での世界一長寿傾向がさらに進みつつあることを発表した。高齢者の心身の健康維持と生き甲斐づくりは、今後ますます、重要な課題となると思われる。また、少子化のもとで、青少年層に早くから心豊かな市民意識を育てることも重要であろう。

このような観点から、園芸に関わる市民活動のあり方を探ることはこれからの「社会園芸学」の課題として不可欠であり、今後、この分野において、園芸を学ぶ学生が基礎知識を応用し、社会で活かすことができるようなシステムづくりが必要であると考えられる。

## 参考文献

- Crockett, J.U. (園芸文化協会日本語版監修) 『一年生草花』 タイム ライフ ブックス, 1974.
- 第一出版センター編 (塚本洋太郎監修) 『花のくらし 春』 講談社, 1996.
- Brickell C. (ed.), Encyclopedia of Gardening, The Royal Horticultural Society, London, 2002.
- 堀田力, さわやか福祉財団編 『ふれあいボランティアガイド』三省堂, 1995.
- 堀田力, 雨宮孝子編 『NPO 法コンメンタール』日本評論社, 1999.